

	よしみ えり
氏 名	吉見 英里
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博甲第 1033 号
学位授与の日付	令和 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専 攻	工芸科学研究科 バイオテクノロジー専攻
学 位 論 文 題 目	幼児の運動能力、身体表現能力および社会性の発達に関する研究
審 査 委 員	(主査)教授 野村照夫 教授 来田宣幸 教授 秋野順治 助教 山下直之

論文内容の要旨

本論文は、リズムダンスなどの運動プログラムの体験による動くことを通じ、自発的に活動する意欲を高め、保育者や他児とのコミュニケーションを図ろうとする幼児の社会性の発達について明らかにすることを主目的とした。その主目的を達成するため、本論文は 3 編の基礎論文を基に、5 章で構成した。第 1 章は序論、第 2 章は幼児に向けた(コーディネーション運動を用いた)リズム遊びを中心とした運動プログラムの作成と実施による幼児の調整力に及ぼす影響を学年別に明らかにした。第 3 章は運動プログラムによる幼児の運動能力に与える影響と身体表現能力に及ぼす影響を検証した。第 4 章は運動プログラムによる幼児の動きを通じた社会性の発達を明らかにした。第 5 章は全体を総括した。

第 1 章では、幼児の運動能力、身体表現能力および社会性の発達について、運動遊びやスポーツにみられる運動能力、リズムダンスや表現運動などにみられる身体表現能力、運動あそびや身体表現にみられる社会性の発達に関する文献をレビューし、リズム遊びを中心とする運動プログラムを作成し、介入によって調整力、身体表現能力、社会性の発達に及ぼす影響の究明を研究目的として設定した。

第 2 章では、リズム遊びを中心とする運動プログラムが幼児の調整力に及ぼす影響について明らかにするために、4 歳児 46 名、5 歳児 34 名を対象とした。歩行、跳躍、回転、支持、リズム、バランスの 6 種目で構成された運動プログラムを作成した。運動能力テストはとび越しくぐり、ジグザグ走、反復横跳びを実施した。初期テスト、非介入期 4 週間、介入前テスト、介入期 4 週間(1 日 6 分、計 20 回)、介入後テストが行われた。運動能力テストの結果、ジグザグ走と反復横とびによる敏捷性の向上が明らかになった。とび越しくぐりによる巧緻性の有意な向上は認められなかったものの、4 歳児では高まる可能性を示唆した。運動プログラムは敏捷性に与える影響が大きいことから、リズム遊びを中心とする運動プログラムは敏捷性を中心とした調整力の発達に有効であることを示した。

第 3 章では、運動プログラムが運動能力と身体表現能力に及ぼす影響について検討するために 3 歳児 29 名、4 歳児 44 名、5 歳児 33 名を対象とした。第 2 章と同様の運動プログラムが用いられ

た。運動能力テストは両足連続飛び越し、ケンケンパを実施した。身体表現能力の観察評価は、動き、空間、ダイナミック、時間、リレーションシップに関する 12 項目を 2 名の専門家が評価した。テスト期、非介入期、介入期は第 2 章と同様であった。運動能力では、4 歳児と 5 歳児に向上が認められ、3 歳児では一部の向上が認められた。身体表現能力については、学年別の変化が明らかにされた。動き、空間、ダイナミック、時間に関する項目は交互作用が認められず、学年に関わらず高まることが示唆された。

第 4 章では、幼児の身体表現にみられる社会性の発達について主に検討した。リレーションシップは、初期測定と介入後測定の値には学年差が認められたが、介入前測定の値には学年差が認められなかつた。概ね測定時期の進行に伴い評価得点の増大が認められた。「お互いのリズムに合わせて運動する」については、特に 3 歳児への影響は大きく、1 回の体験が社会性の発達に影響を及ぼす時期であることが示された。これにより、継続的でなくとも運動プログラムの経験によって他者との関係を築く社会性は芽生えると考えられ、動き、空間、ダイナミック、時間に関する項目と異なる傾向が伺われた。

以上の結果から、幼児の調整力、身体表現能力、社会性の発達に影響を及ぼすことが明らかとなり、幼児の動きたい欲求を満たす運動プログラムを作成、実施できたと考えられる。運動能力は 4 歳児、身体表現能力の影響が大きいのは 3、4 歳児であることから、運動プログラムの体験は 4 歳頃からの取り組みが効果的であることを提案した。運動プログラムの体験は運動能力と身体表現能力を高め、幼児の社会性の発達から学年差を超えた積極的な行動を引き出すことが可能であると総括した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、リズムダンスなどの身体表現による運動を通じ、保育者や他児とのコミュニケーションを図る幼児の社会性の発達について明らかにすることを主目的とした。幼児に向けた(コーディネーション運動を用いた)リズム遊びを中心とした運動プログラムの作成、介入による、幼児の運動能力(調整力)、身体表現能力、社会性の発達に及ぼす影響を学年別に明らかにした。幼児教育に有意義な多元的研究であると評価できる。

運動プログラムによる幼児の運動能力、身体表現への影響についての先行研究は多いが、音楽を用いたリズム遊びを中心とした運動プログラムの有用性と動きを通じたコミュニケーションによる幼児の社会性の発達を数値化した研究は少ない。本論文は、これらの課題を明らかにした点で新規性が認められる。リズム遊びを中心とした 6 分間の運動プログラムを作成し、4 週間の介入実験をおこなった。本運動プログラムは幼児の運動能力の中で、ジグザグ走や反復横とびのパフォーマンスに関する敏捷性に与える影響が認められた。これは、独創的な運動プログラムの有用性を示すものと評価できる。また、身体表現能力は、動き、空間、ダイナミック、時間、リレーションシップに関する観察評価がなされた。その得点の評価者間相関は、尺度ごとに 0.823~0.874 であり、客觀性が確認された。測定時期に有意な主効果が認められ、学年に関わらず高まっていくことが明らかにされた。身体表現能力を多様な観点から数値化したことに新規性が伺われた。さらに、社会性の発達は、学年によって多少上下動が認められるものの概ね測定時期の進行に伴

い評価得点の増大が認められた。これは運動プログラムの経験によって他者との関係を築く社会性が発達することを示唆し、教育上の有用性が伺われる。これらの結果より、幼児教育の現場において、リズムダンスのような身体表現による運動は、集団での取り組みによって幼児の運動能力と身体表現能力を高め、動きを通じた幼児の自発的な行動により社会性を発達させることが提言された。今後の発育発達研究の発展性が期待される。

なお、本論文は全て申請者が筆頭著者である国際誌への掲載を含む、レフェリーシステムのある学術雑誌に既に公開されている以下3編の論文で構成された。

【主論文】

- 1) Eri Yoshimi, Teruo Nomura, Noriyuki Kida (2021) Effects of a Rhythmic-Play Exercise Program on Coordination in Preschool Children. *Advances in Physical Education*, 11(2): 207-220. DOI: 10.4236/ape.2021.112016
- 2) Eri Yoshimi, Teruo Nomura, Noriyuki Kida (2021) A Study of Young Children's Coordinated Movement—The Effects of a Rhythmic-Play Exercise Program on Physical-Expression Ability. *Advances in Physical Education*, 11(1):118-134. DOI: 10.4236/ape.2021.111009
- 3) Eri Yoshimi (2021) Sociability through the Movement of Young Children: The Effects of Exercise Programs involving Rhythm Play on the Potential for Physical Expression. *International Journal of Social Science Studies*, 9(4):43-54. DOI: 10.11114/ijsss.v9i4.5278